

らいぶ LIVE 創 REATOR つくりえいた-

NO.47
研究広報誌

教育研究発表会
2009の
お知らせ

CONTENTS

研究会開催に当たって	1
研究会各授業PR	2
学習紹介：むかしばなしを楽しもう	3
学習紹介：ぼくはここにいるよ～表現する力を育てる算数の指導	4
学習紹介：運動に慣れ親しませるための手立て「跳び箱を使った運動(第2学年)」	5
特集記事：「フィンランド教育視察紀行」	6
附属小研究会・研修会ご参会へのお礼/附属小・新刊書籍のご案内	8

学びの質の高まりをめざして

～ 課題に向かう対話を深める～



ごあいさつ

子どもが本当に学ぶとはどのような姿なのでしょう。教材と対話しながら没頭する姿もそのひとつではないでしょうか。子ども相互の思いや考え方の交流を通して、学びが広がり、深まる「協同の学び」をキーワードに授業実践を重ね、「学びの質の高まり」をテーマに追究してきました。子どもの力を引き出し育てる授業を展開したいと考えております。

当日は、研究授業や研究協議会を通して取り組みの成果の一端をご覧いただき、ご参加のみなさまと共に深め合いたいと思います。午後には、東京大学大学院教授、秋田喜代美先生に「新学習指導要領を越えて～学びの質を高める対話～」というテーマのもとにお話をさせていただきます。

皆様方のご参加を心からお待ちしております。

学校長 川本 治雄

期 日

平成 21 年 10 月 31 日 (土)

8:00 8:40 8:55 9:10 10:10 11:10 12:40 14:00 14:15 15:45

日 程

受付

概要発表

移動

研究授業

移動

研究授業

移動

協議会

昼食

全体会

講演会



主催・会場
後 援

和歌山大学教育学部附属小学校
和歌山県教育委員会 和歌山市教育委員会
和歌山大学 和歌山県市町村教育委員会連絡協議会
和歌山県連合小学校校長会 岸和田市教育委員会
阪南市教育委員会 泉南市教育委員会 岬町教育委員会

講演 / 講師
東京大学大学院教授
秋田喜代美先生

1 - A 算 数	土岐 哲也 ひきざん	線り下がりのある引き算の計算方法やきまりなどを、子どもたちが操作活動や話し合い活動をしながら見つけます。見つけられたことを活用できるような学習を展開していきます。
1 - B 国 語	中西 正子 くじらくも	1年2組の子どもたちとの楽しい時間を、くじらくもに寄りそい読み進める試みをします。想像をふくらませ、くじらくもの心の変容をとらえるための手だてを工夫します。
1 - C 図 工	西井 恵美子 あつめて ならべて...	今、旬を迎えている「鑑賞」の学習、そして「言語活動」を大切にしたい題材です。隣接している近代美術館の美術作品やコレクションを通して学びます。
2 - A 体 育	谷口 佳都司 2Aタッチボール	鬼遊びの要素をもったタッチボール。低学年なりに相手チームの特徴を見つけ、自チームの特徴を活かした作戦で攻防し、集団対集団で競い合う楽しさを味わわせます。
2 B 国 語	北川 勝則 お手紙	2人の言動から「なかよし」を読み取ります。その際、人物の視点を問うことで、個性豊かな心情を表す言葉を引き出します。それを教材文に書き加えていく学習を展開します。
2 - C 生 活	居澤 結美 いろんな木のふしぎ	子どもたちが1学期からいろんな葉っぱの不思議を見つけました。ものづくり、遊び活動などを通して、五感をはたらかせて、それぞれの不思議を考えていきます。
3 - A 社 会	片桐 宏 総本家駿河屋のひみつ	「駿河屋」工場の生産活動や、販売店での仕事の様子などを調査・見学する活動を通して、働く人々の工夫や努力、こだわりなどに視点を置きながら学びを深めます。
3 - B 算 数	宇田 智津 あまりを考えて	「あまりはどうすればいいの？」計算はできるけれど、文章問題ではあまりをどうするのか考えないとはいけません。算数的活動を通してあまりを意識した学習をすすめていきます。
3 - C 理 科	中井 章博 風やゴムの？をさぐれ	風やゴムの働き・様子を調べ、エネルギー概念の基礎を構築します。その目に見えないエネルギー変換の現象を、イメージ図を使って思考を表出し、思考の深化を促します。
4 - A 体 育	上野 佳彦 ハードル走	やさしい場や学習の進め方を工夫することで、走り越す楽しさを味わわせたい。そして、見合いや教え合いのかかわりの中で、速く走りぬける方法を楽しみながら考えさせたい。
4 - B 総 合	藤原ゆうこ・神山求実 4B フルーツランド	“果樹王国わかやま”の魅力をさぐり、「わかやまポンチ」に引き続いて、そのステキをPRする活動を展開していきます。めざせ、わかやま大好き子！
4 - C 国 語	須佐 宏 ごんぎつね	ごんはどんな思いで兵十に栗や松茸を届けていたのだろうか。“びびっと”シートを活用しながら、ごんの思いについて考えを伝え合い、自己の読みを更新していきます。
5 - A 外国語活動	辻 伸幸 クイズ大会をしよう！	What's this? / 英語ノート 1 Lesson7 をベースに、子ども達にとって楽しく、無理のない授業展開を試み、コミュニケーション活動を取り入れていきます。
5 - B 理 科	馬場 敦義 もののとけ方	目に見えないものに焦点をあてイメージを膨らませていきます。子どもの思考をイメージ図とことばで綴り、“ものがとける”とはどういうことなのかをさぐっていきます。
5 - C 音 楽	田辺 麻衣子 和音を作ろう	「度・度・V度って何？」と？がたくさん飛び交う和音の学習。自分たちで和音を作る楽しさから、まずは和音を身近に感じよう。
5 - A 音 楽	江田 司 度の和音がもつ魅力	つい尻込みしてしまいがちな和音の指導。度の和音が発展的な性格をもつことに着目して、探求的な活動から、音楽の魅力と思いや意図をもって表現できる子どもにさせます。
6 - A 社 会	梶本 久子 和・再生プロジェクト	この夏関心が高かった総選挙！6Aでも政治グループをつかった子どもたちが和歌山への熱い思いを教育・安全・観光...、いろいろな角度から徹底討論します！
6 - B 体 育	北端 一喜 みんなでつなごう...	アタックを決めるおもしろさ。レシーブを拾ってつなげるラリーの楽しさ。色々なタスクゲームを工夫し、6B独自のルールを作って、ボールゲームの技能習得に迫ります。
6 - C 総 合	山中 昭岳 未来をつくるのは私だ	グループ学習において「思考ノート」を活用することで、互いの考えを共有し、発展させ、学校ビオトープの計画や管理時の意志決定に子どもたちが主体的にかかわっていきます。
1 2 F 算 数	市川 哲哉 1年ひき算 2年かけ算	1年：くり下がりの計算のよい方法を、子どもたちが話し合いながら見つけます。 2年：5の段までの九九の表から、その決まりを発見。さて6の段からの九九は？
3 4 F 国 語	三上 祐佳里 物語の世界を体験する	3年生は「ちいちゃんのかげおくり」4年生は「一つの花」を扱います。語り手が淡々と語る戦争を、一人ひとりが間近で見ているように読むことで、物語の世界を体験します。
5 6 F 理 科	西村 文成 電気とエネルギー	5年は電磁石を探ることで電流の働きについて追究し、6年は電気の利用の仕方を推論しながら調べ、電気の性質や働きをとらえ電気とエネルギーについてさぐっていきます。
F 組全 学活・総合	複式担当教員 複式協力プロジェクト	今年は「影絵」に挑戦。顔の表情や声の表現ではなく、体を使った影の表現を創り出します。異年齢集団での協力が醸し出す協同的な学びをご覧ください。

むかしばなしを楽しもう

～ 伝統的な言語文化に関する事項の実践～

国語科
2年B組担任
北川 勝則



新学習指導要領では、新たに「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」が示された。第1・2学年では、「昔話や神話・伝承などの本や文章の読み聞かせを聞いたり、発表しあったりすること」とされている。本実践では、単に読み聞かせをして終わるという受け身の学習ではなく、日常での読み聞かせを生かしつつ教材に子どもたちが積極的に関わり、楽しみながら国語科としてめざす力をつけられることを目指した。

1 時間での取り組み

『むかしばなしを楽しもう』

・楽しみながら伝統的な言語文化に触れ、国語の力もつけるために、「読書へのアニメーション」的な展開を行う。

展開1 ダウトをさがせ！

指導者がわざと読み違えるところを見つけるゲームである。ゲームの前には、該当部分のテキストを提示し、何度も音読させる。子どもたちにとっては、ゲームで間違いを見つける準備の活動であるが、昔話を声に出して繰り返し読むことで独特の語り口調や言い回しなどにも気付くことをねらっている。

展開2 それからどうなるの？

読み聞かせの途中で話を止める。そして、続きをそれぞれに予想させるものである。その際、根拠を示しながら話し合う。そして、それを参考にして続きのお話を創作して書くのである。



『読書へのアニメーション』とは、モンセラ・サルトさん（スペイン）が、読書の楽しさを子どもたちに伝えようと開発・体系化した読書指導メソッドである。

日常での取り組み

本校では、保護者による図書ボランティアグループ『LaLaLu』があり、週1時間の図書の時間には、読み聞かせをお願いしている。その中で、昔話を積極的に取り上げてもらっている。また、担任や学校図書館司書も読み聞かせを行っている。

継続的に昔話の読み聞かせをきくことで、

- ・ 昔話には、似たような展開があること
 - ・ 繰り返しがたくさん出てくること
 - ・ 独特の表現があること
- など、いろいろなことに気付くことができる。



相互に補完し合う

『みるなのくら』を楽しもう

昔話『みるなのくら』では、12番目の蔵だから12月に関係のある、ものが出てくるという予想が出された。また、今までの読み聞かせの経験から、「見てはいけない」というものを見たら見られたものがきえるという発言や、悪いことが起こるといった意見も出された。

話し合いの後、創作文を書く。

すると、いままで立っていたはずのやしきはきえ、山ざとのまん中に立っていました。そして、どこからか、あねさまの声がきこえてきました。「わたしは、じつは、うぐいすだったのです。わたしはもとのすがたになって、空をとんでいたんです。けれど、うぐいすだというしょうたいを見られなかったのです、十二のくらをあけないでといったのです。」といいました。わかものは、こうかいました。そのあと、さとにあるいていきました。

ぼくは ここにいるよ

順番や位置を表す活動を通して、
表現する力を育てる算数の授業

算数科
1年A組担任
土岐 哲也



新学習指導要領では、思考力・判断力・表現力の育成が重視されるようになった。『なんばんめ』の単元で、自ら表現しようとするような授業づくりを考えた。

日常生活の中から表現する場面をつくる

子どもたちの生活の中で、順番を意識している場面はたくさんある。例えば、図書の本を借りるときや遊具で遊ぶときなど順番を守っている。しかし、そういった順番を意識することは多くあっても、その順番を数を使って表すことは意外と少ない。クラスで並ぶときも、「前から6番目」と言うより「中河君の後ろ」と言うことが多い。そこで、普段の学校生活の中で意識的に順番を表す数を使わせるように考え、次のような問題を提示した。

授業参観も近いので、自分はどこに座っているのか、お家の人に教えてあげよう！

提示すると子どもたちは、早速口々に「君の後ろ」という声が聞こえてきた。すると「ダメだよ、お家の人は、君の場所はわからないよ」という声も聞こえてきた。そこで、どんなふうに伝えたとお家の人はわかりやすいのか考えさせてみた。

自分の考えを文字で表す

まず、子どもたちにクラスの座席表を配り、自分の座っている場所に印をつけさせた。その場所をどんなに言えばいいのか、プリントに書かせた。すると、「前から2番目」「ローカ側の席」などが目についた。しかし中には「右から3番目、前から2番目」と書いている子もいた。

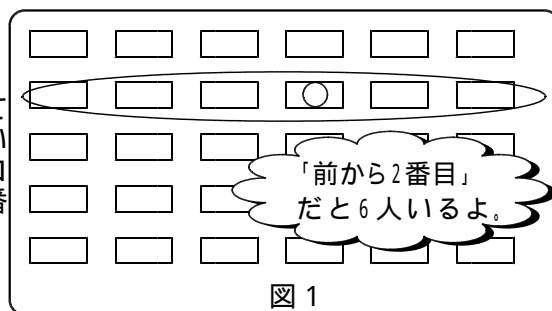


図1

それぞれの考えを伝え合う

次に、隣の席の子ども同士で、自分の書いた座席を表す方法を説明させた。そして、黒板に大きな座席表を掲示し、子どもたちが考えた方法を発表させた。

「前から2番目です」「それでは、前から2番目の子は6人いるからわからないよ(図1)」「前から2番目で右から3番目って言えばわかるよ」「そうだ、前から2番目の人は6人いて、中河君はその人たちの3番目になっているんだ」子どもたちの中から拍手が起こった。

いろいろな表現があることを知る

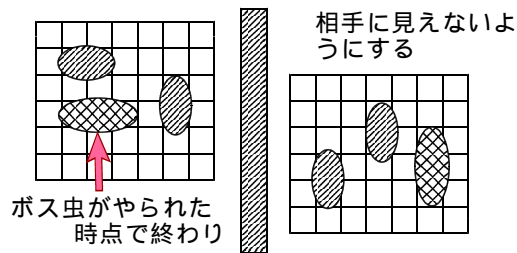
「これでお家の人もわかるね」「うん」「絶対?」「・・・」「じゃあ、先生が実際に確かめてみるよ」。掲示物ではなく実際の座席で確認した。「右から3番目だね」と子どもたちの左側から数え始める。すかさず子どもたちは「違うよ、先生」。「でも、先生の右はこっちだよ」子どもたちと向き合っているから、子どもの右と教師の右は反対になる。「じゃあ、ローカ側からって言えばいいんだ」という声が上がった。

すると、「反対にしてもいいんじゃない」。「左から4番目、後から4番目」という言い方もできるというのである。

「ロッカーの場合はどうだろう?」と尋ねてみると、すぐに「上からとか、下からって言えばいい」とかえってきた。自分のロッカーの位置を隣の子に伝え、それを聞いて位置を当てさせた。そして、最後の授業では、『虫退治ゲーム(図2)』をして楽しんだ。

さいごに

今回の実践は、教科書の「1列に並んだものの何番目」の発展として、空間的な位置関係を扱ったものである。子どもたちは、位置を表現する方法がいろいろあることを知るとともに、「全体の中の自分の位置」についても意識できるようになってきたと思われる。



2人で行うゲーム
マス目のある紙に、数を決めて『悪い虫』の絵を書く。
「右から何番目、左から何番目」と相手に言う。言われた方は、その位置に×印をつける。それを交代しながら行う。
相手の『悪い虫』の上全てに×印をつければ、『悪い虫』を駆除できたのでヒーローになれる。

図2

運動に慣れ親しませるための手立て

「跳び箱を使った運動（第2学年）」の単元で行った指導内容

体育科
2年A組担任
谷口 佳都司



子どもたちが運動やスポーツに親しもうとする動機は何か。それは、魅力や楽しさを味わうことだと考える。運動の苦手な子が、「できないからしたくない」ではなく、「できないけど（得意ではないけど）楽しい」と感じることができる体育授業を目指したい。

子どもたちにとって、跳び箱を使った運動とは…

- ・「できる」「できない」がはっきりした運動であり、「できる」と学習意欲が高まるが、「できない」と意欲が低下したり跳び箱運動自体が嫌いになったりする可能性が高い。
- ・失敗したときのケガや衝撃、跳び箱の高さに対する恐怖心がある。
- ・日常生活ではあまりない動きである。
- ・跳び越す動作に魅力がある。

指導にあたり心がけること

- ・恐怖心を取り除いたり経験不足を補わせたりする内容を入れる。
- ・誰もが思いきり体全体を使って運動できるようにする。
- ・安全な「踏み切り」「空中動作 腕支持」「着地」を部分的に練習させる。
- ・一人ひとりに、自分なりの上達が期待できる活動を入れる。

基礎感覚や基礎技能づくりを多く取り入れる。

予備運動的な動きを取り入れる。

- ・「馬跳び」…両腕支持 力の入れ具合 踏み切りのタイミング 体の使い方を覚える。
- ・「音楽やリズムに合わせて踏み切り」…4拍子のリズムで助走から踏み切りの動作の感覚を養う。

場(コーナー)で運動する。

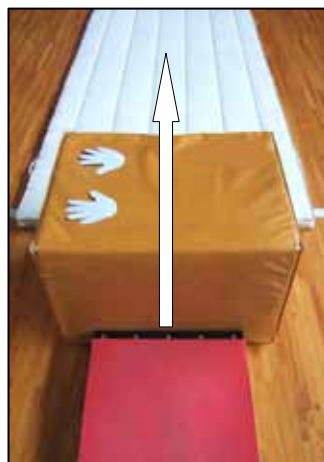
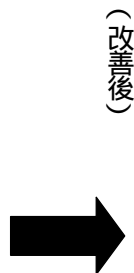
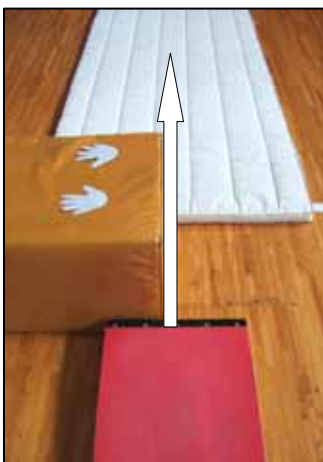
- ・跳び箱をたくさん並べて、その上を歩いたりジャンプしたりして渡っていく場
- ・跳び箱を階段状に縦方向に並べ、高い位置から着地をする場
- ・踏み切り板を使って、助走から両足踏み切りでより遠くへジャンプする場



跳び越し方の指導の工夫

安全で安定した「横跳び越し」の腕支持と空中動作

横跳び越しにチャレンジしている子どもたちの様子を見てみると、お尻や足が上らず、ボックスの横をすり抜けるだけで、跳び越すという動きにはなっていなかった。また、流れるような腕支持で、しっかり手を着けず、手首をひねって痛めてしまいそうな子が多かった。着地もピタッと止まらず不安定になっていた。そこで、ボックスを真ん中に置き、手の着く位置も変更した。(下右の写真)



初めの段階では、手を着いて、いったん上に跳び乗り、その後跳び下りて着地させた。その動作を何度かやるうちに体の使い方を確認でき、手の着く方向や着地も安定した。最終的に下半身をフワッと浮かした空中動作で跳び越す子が増えてきた。

フィンランド教育視察紀行

1・2年F組
複式担任
市川 哲哉



今夏、フィンランドの複式学校を視察した。小中高校はじめ、日本の文部科学省にあたる教育省や、教科書出版会社など、幅広くフィンランドの教育に触れることができた。この稿では、学校の写真などを交えながら紹介するとともに、説明を受けて私が感じたことも付け加えたい。

教科書出版会社「WSOY」 一番初めに行ったのが、フィンランドの教科書出版会社の「WSOY」だった。教科書が出版されるまでの過程を順に紹介された。フィンランドは日本のように教育省による教科書検定が行われていない。また教育省からは大まかなガイドラインが示されているだけで、それに沿って教科書を作るとそのまま販売されるということだった。いくつかの教科書出版会社がある中で、どの教科書を選ぶのかは自治体や学校に任せられており、自分たちの教科書を採用してもらうために、製作段階から現場の教師もチームに入って、ニーズにあったものを作るようにしているということだった。教師が自ら教育課程を編成するという気風がこんなところにも表れていると感じた。



カラフルな教科書

説明が終わって、実際に教科書が売られているお店に行き、いろいろな教科書を見せてもらった。小学校のものしか見る時間がなかったが、色使いがとてもカラフルで、描かれているキャラクターもかわいらしく、ちょっと開いてみたくなるものばかりだった。子どもが楽しく学習できるように作られていると感じた。もうひとつ気がついたことは、ここの出版社の教科書はどれも、「書き込み式」になっていた。この後いくつかの学校を回ることになるのだがそこでも「書き込み式」の教科書を使っていた。

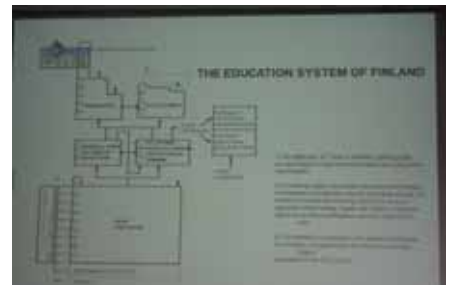
教育省 次に日本の文部科学省にあたる「教育省」に行った。最近改装されたという建物は、すでに「お役所」という感じがしない。広々とした受付にはモニタでいろいろな情報が流されていた。また説明される部屋に行くまでの廊下には、カラフルな絵が描かれてあった。



改装したばかりの建物

ここではフィンランドの教育について、以前は中学校で数学の先生をしていたという広報担当の方から、歴史的な教育制度の流れなど、かなり丁寧に説明を受けた。印象に残った話は、フィンランドという国は、特に目立った資源がない国なので、「ひと」が資源なのだということ。だからその資源の「ひと」を育てることにかかりのお金を使っているということだった。具体的な数字は分からないが、フィンランドという国全体で、教育にお金をかけて「ひと」を育てようとしているのだと感心した。またこの教育省が出している大まかなガイドラインに基づいて、自治体や学校が決定できることが多かったことにも驚いた。たとえば教育計画を立てられる（教科の時間数などは国が決めている）。これは自治体で少し高い目に教育レベルを設定できる。予算も決められる。新規採用は校長が決める。これも学校のレベルを上げられる。クラスの大きさをきめられる。教科書・教材を選べる。など。

またフィンランドの学校制度の説明も受けた。義務教育は日本と同じ9年間で、その前1年間がプレスクールという幼稚園がある。中学校を卒業するときに全国統一のテストを受け、普通高校もしくは職業高校に進学する。どちらにも進学しないものは6%程度いて、1年間勉強して再度全国統一テストを受けるものと、高校にいけないものに分かれるようである。高校は単位制で、普通高校に行ってから再度職業高校に入ることもできるし、数は少ないが普通高校に通いながら職業高校に行き単位をとることもできるそうだ。近年は手に職をつけられる職業高校の人氣が上がってきているという説明だった。もちろん職業高校から大学や専門学校へ進学できるし、就職もできる。



多くのスライドで説明を受けた

クオッパヌンミ小中学校センター ヘルシンキの隣の人口28000人の市で、その中心地に2つの学校を合併してできた学校で、1年生から9年生まで608人が通っている大きな学校である。教師は50人。それに対して教育助手50人というから、教師一人に助手が一人つくことになっている。またこの学校には特別支援学校、プレスクール(幼稚園)もあり、義務教育すべてに対応している。学校の中にコンピュータも多く、教室はもちろん廊下や自習ルームのようなところなどにも数多く置かれていた。1クラスの人数はどのクラスも20名程度と少人数だった。ここでいろいろの説明してくれたのは、市議会議員も勤めるプリリオ先生だった。彼女は中学生の担任で、日ごろから子ども同士のかかわりを大切にしていると話されていた。そのため授業も、グループを取り入れることが多く、この日はいろいろは人への抗議文を作るという国語の授業を参観させてもらった。グループ別にお母さんへの抗議文や学校の先生への抗議文や教育大臣に対する抗議文を作り、ただ文章を考えるだけではなく、どんな風に伝えれば取り上げてもらえるかというところまで考えていた。プリリオ先生の話によると、フィンランド人は孤独癖があり、独りぼっちになる傾向がある。だからそうさせないためにグループによる学習を取り入れ子ども同士の交流を大切に考えているということだった。しかし、それは誰からもそうするようにといわれたわけではなく、プリリオ先生自身が考えて取り組んでいるということだった。

この学校で最後に見せてもらった6年生の英語の授業には驚いた。フィンランドの小学校では3年生から英語を学習しているのだが、6年生ですでに日本の中学2・3年生くらいの学習をしていた。しかもほとんどの子がテープの音読だけで文章を理解していた。後に行った高校での英語で英語の授業をしていることとあわせて、フィンランド人のほとんどが英語を話せるようになる秘密を見たような気がした。

ヨキクンナンコール小学校(複式の小学校) 私の一番楽しみにしていた複式の小学校。前日行った小学校と同じ市だが、そこからかなり郊外に入ってしまった。途中麦畑が広がっており、農家で飼っている馬も見かけた。小学校に着くと校長先生が案内してくれた。校長先生といっても見た感じかなり若く、校長先生自身が5・6年生を担任していた。最初に1・2年生の教室を訪れた。1年生11人・2年生10人で日本の複式学級よりも人数が多かった。日本のように何人より少なくなったら複式学級だというような規定はないそうで、自治体で複式なのか単式なのかが決定されるということだった。しかも教師は校長先生がスカウトしてくるということだった。現にここの1・2年生の担任の先生は、年配の女性だったが、つい昨年度までは教育省で行政の仕事をしていたそうで、教師として教壇に立つのは初めてだった。校長にスカウトされて、今年から始めたということだった。どの教室にもパソコンがあり、そんなに新しくないものだが、きちんとインターネットにつながっていた。3・4年生の教室では、算数の授業をしていた。4年生は3年生のとき習った計算問題や文章問題を自習していた。3年生は、教師とともに学習していた。3・4年生は4人グループで活動することが多いようで、グループになっていた。そんな中集中力のない男の子2人ほどが先生の机のすぐ前で学習していた。5・6年生は美術の時間で絵をかいていた。教室にはドラムやベース、ギターなど楽器が一通りそろっていた。私たちの歓迎に歌を歌ってくれた。日本について独学で勉強しているという子もいて、逆に日本のことや日本語の質問を受けた。

複式学級では、自主性やリーダー性が育つという校長先生の話から、日ごろ私たちが感じているのが客観的なものになった。



クオッパヌンミ小中学校センター



いろいろなところにパソコンが



ヨキクンナンコール小学校



右が1年生・左が2年生

ビヒティ高校 今回見学に行ったのは普通高校で、かなり新しい学校だった。また単位制で、生徒は制服も着ていないので、日本の大学のような雰囲気だった。英語の授業を最初に参観した。びっくりしたのが、英語の授業を英語で行っていた。フィンランド語が一切話されない。教師も生徒も英語しか話していなかった。数学の授業や、美術の授業も見せてもらったが、どの教室でも落ち着いた雰囲気の中で生徒たちは授業の中身に取り組んでいた。最近日本の高校の授業を見ていないので比べられないが、かなり違う部分もあるのではないかと感じた。案内してくれた校長先生は、かなり若い女性の先生で、教頭先生も4歳の子供がいるという女性だった。

小中学校センターもそうだったが、学校の職員室がかなり日本と違っていた。フィンランドでは職員室は休憩するところで、教師がお茶を飲んだり、同僚と話したりとゆったりと時間を過ごすところだった。決まった自分の机もなく、大きなソファがおかれており、皆さんリラックスしていた。隣には少人数の会議室や仕事や調べものをしたい先生のための作業室もあった。全体としてかなりゆったりとした時間が流れていた。

何校か学校をまわって感じたことは、一つ目として、元気な女性の先生が多いことだった。男性の先生の姿は数名しか見かけなかった。それにあまり高齢の先生を見かけなかった。日本の先生の年齢層とはかなり違っていた。

二つ目として、ICTがかなり進んでいるということだった。設備だけではなく、それが各教室でかなり使われていた。もちろん学校の中で子どもたちが使えるコンピュータの数もかなり多いと感じた。
(了)



ビヒティ高校



職員室の風景

《附属小研究会・研修会ご参会へのお礼》

6月19日(金)に本校で行われた「複式授業研究会」には、多数の先生にご参加いただき、誠にありがとうございました。3つの授業を提案し、その後協議会を持ちました。協議会ではさまざまな意見を頂き、今後の私たちの実践の糧にしていきたく思っております。 複式部一同

「夏季教科領域別研修会2009」を、7月30日(木)31日(金)に開催いたしましたところ、二日間にわたる10の分科会に、延べ1000人を超える参加者を得て、各教科や領域で研修を深めることができました。厚くお礼申し上げます。本年度の新しい企画といたしまして一日目全体会では「3年生の算数科の提案授業」を公開し、「数学的な考え方を育てる授業改革」をテーマに、東京大学大学院教授の佐藤学先生と著名な数学者で教科書編集にも関わってこられた東京大学大学院教授の岡本和夫先生のお二人にご対談(下写真)いただきました。 学校長 川本治雄



《年間2500人が訪れる和大大附属小！！》

「新学習指導要領」を越える原理とは！？

佐藤 学先生(東京大学)「序」書き下ろし!

今秋新刊出版予定 (和大大附属小 / 東洋館出版社)

『質の高い学びを創る授業改革への挑戦』

～新学習指導要領を越えて～

From Editors

6年ぶりに和大大附属小の書籍が出版されます。

堅苦しい実践報告書ではなく、読み物風に新学習

指導要領を越える学びをアイデア満載で語ります。

10月31日(発売)研究発表会場でお求め下さい!

らいぶ編集部員: 江田, 市川, 藤原, 三上, 上野, 梶本

和歌山大学教育学部附属小学校

〒640-8137 和歌山市吹上1丁目4番1号

TEL (073) 422-6105

FAX (073) 436-6470

URL <http://www.aes.wakayama-u.ac.jp>

E-mail fuzoku@center.wakayama-u.ac.jp